

関東信越税務連絡協議会会長賞

『変わる時代のなかの税』

新潟県立柏崎翔洋中等教育学校 四年 小林 凜子

この春、高校一年生になり、新しい教科書が配られた。今までと変わらないように見えるが、一つだけ違うことがある。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によつて無償で支給されています」の言葉が無くなったことだ。

小中学校への教科書配付が含まれる文教及び科学振興費は、国の歳出のうち四・九%、約五兆六〇〇〇億円を占める。義務教育の頃、多くの人々は税金に支えられて学んできたのだ。気付くと同時に、私はもう保護から卒業してしまったのか、という一抹の寂しさを感じた。

生活になくってはならない保障の裏には、国民によって納められる税金がある。しかし、人口減少が加速する今、納税の負担は現役世代をはじめ、重くなりつつある。

今年の七月、参議院選挙があった。一部の政党が消費税廃止を公約に掲げているのを知り、興味をもったので、消費税が歳入にどれくらい影響しているのか調べてみた。国税庁のサイトによると、歳入のおよそ二十二%を消費税が占めているようだ。二十四兆九〇〇〇億円ほどである。数字の大きさに驚く一方、身近な税だから当たり前の結果のような感じもする。

ある日、立ち寄ったコンビニで募金箱が目に入った。中身は大金ではないけれど、一人一人の温かい想いが詰められている気がした。消費税も似たようなものではないだろうか。毎日支えてくれている国へ感謝を込めて、値段に少しプラスしてお金を払う。思いやり、という気持ちでいると、義務感なく税と関われるかもしれないと思った。

しかし、物価高の今、経済的にも精神的にも余裕がある家庭は多くない。消費税廃止の考えが出てきたのも、そんな状況だったからだろう。時代は変わる。私たちは臨機応変に対応していかなければならない。でも、行動を起こす前に、これまでの仕組みに支えられてきた事実、そしてこれからどうすれば良いのかをよく考えることが大切だ。きっとこれは税にも当てはまる。

「人」という字は二人が支え合っている姿だ、というのは有名な話だ。素敵な考え方だと思う。ただ、一人を支えているのは人だけではないかもしれない。ささやかな気遣い、安全な暮らし、そして税だって、人々の日常を守ってくれている。しかし、そばにあることが普通になっていて、存在とありがたみを忘れがちだ。

私はこれらの存在を当たり前で済ますのではなく、丁寧に感謝して生きたい。今までもこれからもありがとう、と。